

目次

みつばち保育園草創期物語 その1	1
みつばち保育園	2
西池袋そらいろ保育園	3
みつばち会2017年度収支予算&編集後記	4

どろんこの風

みつばち保育園草創期物語 ～その1～

「地域の方々」「地域の方」とは？

その最初的一步から事務局長を務め、法人設立後は理事として、50年の月日を超えて当法人みつばち会の発展にご尽力くださった加藤昌子さんが2017年3月をもって理事会を離れる決断をされました。実は、その加藤昌子さんこそが、みつばち保育園を作って、発展させてきた「地域の方々」の中心人物であり、原動力なのです。みつばち保育園の生き字引のような方が理事会を離れるに当たって、草創期のあらゆることを書き残しておかなければ！そんな切迫した理由から、草創期当時を知る方々にお集まり頂きま

高度経済成長時代・女たちのネットワーク

昭和39年（1964年）といえば、日本は高度経済成長期真っ只中でした。「所得倍増計画」をスローガンに掲げた池田隼人内閣が発足、日本人の働き方は大きく変わり、企業に勤める人が増え、さらに、地方から東京へ労働者が集中したのです。「本当に所得は倍増になった」と平野前理事長。しかし、当時は、女性は結婚したら仕事を辞めるもの、結婚して辞めなくても、妊娠したら当然辞めるもの、と見なされていました。男女雇用機会均等法成立以前のことで、働くうえで女性の権利を守ってくれる法律もなく、現代だったら、セクハラ、マタハラと訴えるに値する言葉をかけられることはザラだったといえます。でも、だからこそ、「結婚しても働きたい、子どもを

産休明け0歳児保育がなかった、けど、必要だった。だから、自分たちで始めた

親が近隣にいる人は子どもを預かってもらうことができましたが、その環境がない地方出身の人は切実でした。当時も、もちろん公立保育園はありましたが、入園できるのは1歳児から。産休明けの0歳児保育はまだ実現していない時代でした。育児休業が保障されていなかった当時、産休明けに職場に復帰するためには、子どもを預かってもらう環境を自分たちの力でなんとかする必要があります。そんな動きの中心になったのが「新日本婦人の会」であり、自然を愛し、福祉を重要視し、住民と共に闘ってきた加藤わたりさんの妻となった加藤昌子さんでした。あるとき、加藤昌子さんは赤ちゃんを産んだばかりの平野早苗さんを紹介されます。…ここに、赤ちゃんを産んだ人がいる。あそこには、預けられなくて困っている人がいる。一緒

当みつばち会の最初の保育園である港区白金4丁目の「みつばち保育園」は、1964年に働きながら子育てをしたいという「地域の母親達」によって産声を上げました。当時は、無認可の保育園でした。その2年後には、認可園として港区で最初の産休明け保育をスタートしますが、それもすべて「地域の方々」の力があってこそでした。

した。

加藤昌子さんは青森八戸のご出身。八戸の赤十字病院の事務職員で、当時盛んだった労働組合運動の執行委員長をされていました。「当時、八戸で私を知らない人はいないぐらい有名だったわよ。そんなことをやっていたから、どこにも嫁のもらい手がなかったのよ（笑）」と豪快に笑われる加藤さんですが、ご縁あって、東京港区で地域住民のために運動、活動をしていた加藤わたりさんと結婚されます。昭和39年のことです。その翌年に、加藤わたりさんは港区の区議会議員に当選、昌子さんがどれほどの運をもたらしたかが偲ばれる年表です。

産んでも働き続けたい」と願う女性たちは、横のつながりを希求しました。港区は、大企業、官公庁をはじめ、大病院も多く、また、港区白金といえば、今こそ都心のおしゃれなエリアとして知られますが、再開発によって白金高輪駅と近隣の高層マンションが整備される前は、町工場街であり、古くからの商店街が活発な下町で、働く女性がたくさんいたのです。その女性たちの求心力となったのが「新日本婦人の会」でした。そこには、リアルな情報と知恵、協力し合う仲間が存在がありました。渡辺さんは言います「出産しても働き続けている女性があそこの会社にいると聞けば、私たちが頑張ろうとするのが勇気づけられたものでしたし、私たち看護婦は、子どもを預かり合いながら夜勤をこなしたりしていたのです」

に子どもを看てもらえないだろうか。それには、場所が必要だ、ベッドが必要だ…。そんなふうには、みつばち保育園は胎動し始めます。みつばち保育園は、今でも小さな規模の保育園ですが、常に時代をリードして働く親たちの希望を実現し、行政を動かしてきた言わば、保育界の小さな巨人だったのです。（続く）



左から、前理事加藤昌子さん、前理事長平野信子さん、済生会病院の看護婦さんで、みつばち保育園にお子さんを預けた経験もお持ちの渡辺さん